

外部記憶装置としての図書館

大学院中国研究科 湯原 健一



「いつもそうだが、何十年も前の昔の論文を読むとき、紙の間に閉じ籠められていた時間が紙面の上で膨れあがり解放の喜びをもって流れ出てくるよ

うな感銘を覚える」

加賀乙彦の小説『宣告』の一節である。若き精神医近木生一郎は拘留所の医官として死刑囚たちの処刑に対する恐怖心という心の闇と対話を繰り返す。そんな拘束状況における精神的病理を新たな症例として報告するとき、彼は自分の母校の図書館を訪ね、過去に書かれた論文に目を通す。『病的着想について』と題された論文は1904年の『ドイツ医学週報』という雑誌の中に何十年もの間、彼に読まれるのを待ち続けるかのようにあった。そして、述懐する。「近木は、自分の書いた論文を、五十年後、百年後の若い学者が読む場面を想像し、学問とは何と奇妙な伝達をとげることかと思う」と。

学問とは、まさに先人たちとの対話である。「ドイツの学者は六十数年後に、極東の若い精神医が自分の論文に読み耽るなどと考えもせず、極東の精神医は自分が見た患者と同じ症例をすでに六十数年前にドイツの学者が報告していたことに驚く」ように学問という知識の連環は、途切れることなく、過去から現在へと続いていく。それは図書館という場が、絶えることなく脈々と人間の思想やアイデアを受け継いでいくからである。人間の文明を「思想-図書-図書館」という流れで捉えるならば、図書館の役割は、歴史に欠くことのできない文明の「環」であり、人類の知識を蓄え、再生する外部記憶装置である、ということができるのではないだろうか。その意味において、図書館とはまさに、人間の知識や思想を図書という形で受け止め、蓄積し、それをさらに新しい思想、知識の再生産のために提供する場所であると言える。

知性を通じて

法学部2部 後藤 睦恵



本のある場所に惹かれるのはなぜだろうか。

人には空間認知という能力がある。周囲の物事を認知する五感以上の触手を具える。直接に触れることなく、存在

を感じられる能力ともいえる。私たちは本を単なる物質以上の存在として感じてはいないだろうか。そこに人間を感じてはいないだろうか。

言葉だけが知性を伝える。本は人間の知の魂だ。あるひとつの研ぎ澄まされた世界がそこにはある。心地よい隣人を、手に取り、扉を開く。優れた知性を通じた出会いがある。

物と情報があふれる時代において、二千年の時を経た本の価値はいかばかりか。時が厳選して、受け継がれてきた確かな価値。時代とともに変わっていくこと。変わらないこと。

私はどれ程の世界に出会えるだろう。この図書館のわずか1%の世界でさえも、知ることなく終わるだろう。しかし、それは大きな喜びだ。ちっぽけな自分の存在の確認と、この世界の豊かさへの確信。今という時が、過去より優れているわけでもなく、未来よりも劣っているわけでもないという確信を持つ。

古い判例集の中には、その時代がある。そこで生きる人々の意識がどうであったか、何が常識であったのかを窺い知ることができる。茶色くなったページが、今は使われなくなった言葉が、時の流れを感じさせる。しかし、そこにある知性が色褪せることはない。

本は時を留める。その蓄積の豊かさは、この大学と私たちにとって財産である。